

地域を知ろう(36)

民話・伝説

No.16 不動尊の話

お不動尊の導き

こんなお陰で、お不動さんのお陰で、お立派な人になった。お話を聞くと、このお不動さん、和州一丁目の十三、救世軍ブリス病院前の旧鎌倉街道といわれて、道筋にあり、隣の美容室で三坪位の空間に祀られて、立派な社殿の中に高さ約五十cm位の石仏で、入り口の石柱の一つには「奉・相州大山」、もう片方には「納・不動明王」と赤で彫られています。

お話は今から約一五十年の昔、江戸時代末期のことです。名を一応、助蔵としておきました。八王子の在で博徒の一人を殺して、間一人を殺した。懸命に逃げました。甲州街道を江戸方面へ、大江戸に行けば助かると思っただけです。ようや、この和州村にたどりつき、「やれやれ」と思い、汗を拭

きながら、歩いた。旅の横の方で声をかけた。助蔵はギクリとして、声の方を見ると、一人の白髪の老人が杖を持って、道の端に腰をかけて、石を見た。助蔵の顔をみると、「お前さんは人に追われて、心の中を見すかすように言いました。」

助蔵は平素の元弱々しく、「はい」と答えます。老人は、「この道を真直ぐ行くと、青梅街道へ行けば、まもなく内藤新宿に着く。その追分で、当分とどまり働きなさい。命は助かるよ」と諭すようにいきました。

甲州街道一番目の宿場、内藤新宿で老人に言われた通り、心を入れ替え、一生懸命に働き、やがて世も明治となり、

助蔵の罪も時効となり、助蔵は人々の信望を集め、一かどの親方となり、あの時、老人の言葉はいつまでも彼の心から離れませんでした。

「あの老人は、きっと御不動様の化身に違いない。これはこの恩返しに、この立派な不動堂を寄進し、石の不動尊をお祀りしました。その後、毎年多額の維持費を寄付したという事です。」



和州一丁目にある不動尊
二〇二二年十一月撮影